
血と林檎

実の白菌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血と林檎

【Nコード】

N2716F

【作者名】

実の白菌

【あらすじ】

午後の静かな住宅街。その内のひとつの家で、事件は起こった。

ああ・・・

俺はなんてことしちゃったんだ・・・

そして手にしていたナイフを落とした。

手が震えている・・・

信じたくはなかった

目の前の光景が自分のつくりだしたモノとは

俺は ソレ に触れてみた。

冷たい・・・

そして真っ赤に染まっている。

さっきまで生き活きとしていたのに・・・
今はその面影すらのかっこっていない。

二階から誰かが降りてきた。
妹だった。

これは何よりも最悪の状況だった。
妹がリビングへ入ってきた。

「？何やってんの・・・お兄ちゃん。」

「え？あ、いや・・・え？」

言葉がでてこなかった。

妹は俺の後ろにあるモノに気が付いたようだ。

「?・・・!?お、お兄ちゃん・・・それ!？」

「・・・」

「ひどい・・・」

「ほんとにごめん。」

だってお前のウサギちゃんリングがあまりにも
ブカツコウだから直そうかと思ったら・・・」

床には完全に耳を剥ぎ取られた ソレ がころがっていた。

「んもーう。初めて作ったんだからしょーがないでしょー、
かわいそかわいそ。」

ころがったリングを抱え上げながらこう言った。

「ところでお母さん知らない?この編み方聞きたかったんだけど
」

「俺は知らないなあ。出かけてるんじゃない?」

「そうかも、じゃあ後でいいや」

そう言い残し、妹は二階へ戻った。

この会話中心臓が何度はちきれんと思ったか・・・。

俺は足でふんずけて隠していたナイフを拾い上げた。
そのナイフには大量の血が付着していた。
ソファの後ろで息もせず横たわっている母の血が。

（後書き）

ありふれた兄の行動の裏の恐ろしい真実。

この作品は僕のデビュー作となったわけですが、是非とも感想を聞きたいので

ドシドシどうぞ！（・・・なんじゃこりゃw）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2716f/>

血と林檎

2011年1月28日09時15分発行